



『大好き』がいっぱい

幼児課 参事 本山 真知子

カレンダーが11月となった途端、急に秋の訪れを感じるようになりました。この原稿を書いているのが、11月初めのため、このような書き出しになってしまいましたが、この教育研究所だよりが皆様のお手元に届くころは、冬の深まりを感じるころとなっていることでしょう。

10月には、栗東市にて滋賀県人権教育研究大会が2日間開催され、多くの方の参加がありました。1日目には開会行事、基調報告、現地メッセージ、特別報告、記念講演があり、2日目は、分科会にて人権を中心に討議が進められました。終了後の総括会議の報告で、それぞれに多くの学びがあったことが伺えました。

私が参加させていただいた分科会では、「安心」をキーワードに4本報告がありました。

保育・教育での「安心」とは？

「自分の居場所がある」と感じられることではないでしょうか。

平成30年3月に改訂された保育所保育指針では、愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感がポイントの一つとして挙げられています。

愛着行動とか愛着関係は、アタッチメントという語の訳語で、誕生後、特定の誰かとの深い信頼関係、その人の傍らにいと安心を深く感じるという感情、心の絆が生まれるよ

うな関係が必要という考え方です。アタッチメントを育むには、子どもの欲求に丁寧に対応する行為が大事とされています。特定の人への信頼感が、他者への信頼感へとつながっていき、自分が無条件でありのまま愛されているという感覚になります。前者を基本的信頼感、後者が自己肯定感と言われているものです。

愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感の育ちを意識した保育の展開が不可欠とされています。（3法令 ガイドブックより）

保育所保育指針 総則 (2) 保育の目標に「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。～」とあります。保育者は、重要な時期に関わっていることに喜びを感じながら、子どもと愛着関係を築き、子どもがありのままの自分を受けとめてもらうことの心地よさを味わうことができる援助や関わりをしていきたいものです。

「大好き」があふれ、「一緒にいると楽しい」「自分の居場所」がある保育園、幼稚園、幼児園、学校でありたいと思います。

令和2年度には、栗東市で滋賀県人権保育研究大会を開催します。栗東市の人権保育・教育がより深いものとなることを願っております。





「にわかファン」と「バイアス」 ～自分自身の感覚を見つめること～

栗東市教育委員会事務局人権教育課
課長 池田 隆

私は、日頃からいろいろなスポーツを観戦することが好きです。今年は「ラグビーワールドカップ2019日本大会」が開催され、私も「にわかファン」の一人となりました。

国籍や能力が違う選手が一人ひとりの個性や得意なことを活かして「ONE TEAM」となって取り組む日本代表の姿は、これからの日本社会のあり方を示唆するようでした。

また、試合が終わると、敵・味方、相手との違いや区別なく、お互いの健闘を称え合う「ノーサイドの精神」は、この社会に生きる私たちにとって大切にすべき価値観であると考えさせられました。

試合を観戦しているうちに、私の中に「不思議な感覚」があることに気づきました。国内の大会やリーグ戦などはほとんど観ないのに、オリンピックやワールドカップといった国際大会で「日本の〇〇選手」とか「日本代表チーム」が出場すると、観戦して応援したくなります。以前から、これはなぜなのだろうと考えていました。

そんなとき、私が日本代表を応援したくなるのは、「**内集団バイアス**」というものが働いているということを知りました。自分が日本という国に所属感を抱いていること、さらに「身内びいき」のような感覚があることです。

内集団バイアスには、正負の面があり、学級や地域の結束を強めたり、部活動など所属集団に誇りを感じて取り組めたりするよさがあります。しかし、これが強まると外集団を排除したり、「自分たちは優れており外集団は劣っている」という差別意識につながったりします。内集団バイアスを利用した例として、ナチスドイツが挙げられます。

「**バイアス**」の意味は「**偏り**」です。例えば、オーディオの音質や音場を変えるのに電圧をかけて音の偏りを出すときなど、「バイアスをかける」と言います。

心理学を学ばれた方にはなじみがあると思いますが、心理的なバイアスとは、「**知らず知らずのうちに持ってしまう物事に対する偏った見方**」や「**先入観**」「**偏見**」という意味です。さまざまな経験や情報によって自分の中につくられます。

心理的なバイアスには、いろいろありますが、中でも「**ネガティブバイアス（否定的な先入観）**」というものがあります。ネガティブな情報の方がポジティブな情報よりも脳へのインパクトが残りやすく、否定的な見方が作られるというものです。

先日、某テレビ番組でネガティブバイアスを説明するのに、次の問題を出されました。

「今、世界全体で予防接種が受けられる1歳の子どもは約何%でしょう。」
①20% ②50% ③80%

私は20%ぐらいかなと予想していましたが、正解は③80%で、ユニセフの取り組みなどによってここまで高まっているそうです。私が「少ないだろう」と思った感覚は、日々のニュースなどで貧困や難民など世界情勢に関するマイナスの情報を多く受け取っているためにつくられたネガティブバイアスであるということでした。

このネガティブバイアスは、差別意識や対人関係に大きく影響しています。メディアからのマイナス情報、保護者のネガティブな認識や感覚が子どもに再生産されること、他者からよくないうわさや悪口を聞くこと・・・などによって、「偏見」「思い込み」が作られてしまいます。

特に気をつけなければならないことは、新聞・書籍・ラジオ・テレビ・インターネットなどのメディアによる情報は制作者がいて、何らかの意図（偏り）があるということです。情報を受け取ったときには、まず、自分自身の感覚を見つめて判断することが大切であると考えています。

例えば、「今日は**天気が悪いので、室内で落ちて書いて過ごしましょう。**」と話しました。みなさんはどう思われますか。

雨が降ると、行事が中止になったり、外で遊べなくなったりしてネガティブに感じる人が多いので、「**雨=よくないもの**」というバイアスがつくられます。しかし、農業に従事されている人にとっては「恵みの雨」で「**雨=よいもの**」と感じておられる場合、何気なく使った「悪い」という言葉によって気持ちを傷つけてしまうかもしれません。このようなときは、「今日は雨なので…」と、事実を話し、物事の是非を表す言葉は意識して使わないようにすることが大切ではないでしょうか。

教職員の言葉や行動、人権感覚が子どもたちの見方・考え方に大きな影響を及ぼすのは言うまでもありません。子どもたちに話すときには、自分の考えを押しつけるのではなく、「このことについてどう思う？」という「問いかけ」と「対話」によって、多面的な見方・考え方ができるようにしたいものです。



せんせい！！
みてみて



あ！ありさん
がいたね！！

治田保育園

砂場で遊んでいた1歳児の子ども達が、アリを見つけました。「いっぱい！いっぱい！」と保育者に話しかけます。またアリの動きに関心を持って、仕草でも伝えていました。巣穴からアリが出たり入ったりする様子に目を丸くして見入っている子どもたちでした。

治田保育園では、「あたたかいまなざしのある環境」「発達段階にそった体を存分に動かせるあそびができる環境」「夢中になって何度も繰り返し遊べる環境」「安全な環境」など、子どもの目線になって環境を考え、子どもたちが安心して生活や遊びに取り組めるよう進めています。ものとの深い関わりから興味や関心を広げ「不思議だな」「どうなってるの？」といった探求心が芽生えてきます。興味をしめしたものになんでも手を出して確かめる様子は、まさに「身体で考える」姿です。身体で学び、考える知性が「おもしろさ」の延長線上で育つよう、これからも保育環境のあり方を探ってまいります。



「人とかかわる体験を」

治田西小学校



昼休みのようす

天気の良い日には、子どもたちは、昼休みに運動場や中庭に出て遊んでいます。屋上から見てみると、多い時では、100人以上の子どもが外で遊んでいます。

ドッジボール、サッカー、遊具、鬼ごっこ、大なわ、中庭でくつろぐなど、思い思いに過ごしています。運動場で遊んでいた子どもたちが、「こっち、こっち」、「順番やでー」、「おーい」「はやくしてやー」などの声を掛け合っている姿がありました。太陽の光を浴びて戸外で活動し、友だちと一緒に過ごす中で、自然と対話が生まれる機会が昼休みにはあります。このような、自然に生まれる機会以外に、本校では「なかよしタイム」という1年生から6年生までの縦割りのグループ活動の時間を設け、子どもたちの交流の機会を作っています。

挨拶も含め、人とコミュニケーションが取れる場を子どもが体験することが大切です。「多様な人々と出会い、共に生きていくうえで、相手の気持ちを読み解いて理解する力が必要である」と言われています。この力の育成に本校でも取り組んでいます。



図書館司書より先生にすすめたい一冊

『なんみんって よばないで。』

ケイト・ミルナー・作 合同出版

荷物は持てるだけ。知らない言葉を覚え、食べたことのない食べ物食べて生きていく。——「そんな状況のとき、きみならどうする？」という問いかけで、難民の暮らしが、自然と自分のこととして思い浮かんでいきます。難民のことを考える時、手掛かりとして手に取ってほしい絵本です。

《図書館 玉川真弓》



『貸出禁止の本をすくえ!』

アラン・グラッツ・著 ほるぷ出版

教育委員会が図書室の本を次々と貸出禁止にすることに納得できないエイミー・アンは、禁止された本を読むために集め出した。するとそれを読みたいという子が次々現れ、秘密の図書館が生まれた! 内気な主人公が、友達を巻きこみながら大好きな本のために行動をおこし成長していく痛快な物語です。

《図書館 田村薫》

『「お手伝いしましょうか？」うれしかった、そのひとこと』

高橋うらら・文 講談社

困っていそうな人を見かけたとき、あなたはすぐに声をかけますか? それとも「声をかけていいのだろうか」と悩みますか? この本は悩む方にはエールを、すぐ声をかける方には更なるアドバイスをしてくれる本です。困っている人の事情はそれぞれ違い、必要な手助けもまた違ってきます。けれども皆、その一言をうれしいと思っているのです。

《図書館 清水優》



『子どもたちは象をどう量ったのか?』

西田知己・著 柏書房

江戸時代、子どもたちが勉強していたのはどんなことだったのでしょ。本書では寺子屋で使われていた教本などから、当時の子供たちが学んでいたであろう事柄を現在の科目に置き換えて再現しておられます。中にはタイトルにもあるようなユニークな問題も! 先人の教えから現代の技術とは違う知恵を得ることで、新たな発想が生まれるかもしれません。

《図書館 清水優》